

巻頭言

広重に見る江戸のハードとソフトの防災



竹村 公太郎

広重の絵は美術品というより、江戸を記録した写真として見ると面白い。

広重の一枚の絵が、徳川幕府の巧妙な治水対策を示していた。

■□隅田川の日本堤

江戸時代、今の隅田川が荒川であった。隅田川は江戸下町の低平地を流れ、大雨のたびに溢れる厄介な川であった。この隅田川の洪水をいかに制御するか、それが江戸繁栄の鍵であった。

隅田川は北西から江戸へ流れ込んでくる。その隅田川が江戸市内に入る右岸側に、微高地形があった。その地形の上に、江戸の最古の寺が建っていた。それが浅草寺であった。

徳川幕府はこの浅草寺に注目した。浅草寺は一千年以上の歴史を持っている、ということは、この一帯で最も安全な場所という証拠なのだ。その浅草寺を治水の拠点とする。

つまり、浅草寺から堤防を北西に伸ばし、今の三ノ輪から日暮里へ続く高台にぶつける。この堤防で洪水を防ぎ、流れを東へ誘導して隅田川の左岸で溢れさせ、隅田川の右岸の江戸市内を守る。

1620年、徳川幕府はこの堤防の建設を、全国の諸藩に命じた。浅草から三ノ輪まで高さ3m、幅は8mという大きな堤防が、80余州の大名たちによって60日余で完成したのだ。

日本中の大名たちがこの建設に参加したので、この堤防は「日本堤」と呼ばれるようになった。

□■治水のソフトウェア

この日本堤は、江戸を守る生命線となった。ここが破堤すれば、江戸の街は一瞬にして濁流に呑まれてしまう。

洪水を防ぐ堤防は、それを築造する以上に維持管理が重要である。

堤防は土で造られている。これを放置すれば、草花があつという間に繁殖してしまう。草花が繁殖すればミミズが発生し、もぐらが穴を掘り、堤防は弱体化していく。実際に表面から1mの深さまで、もぐらの穴だらけだった堤防の事例もある。

地震や大雨も堤防の大敵である。地震は堤防に多くの割目を発生させる。その割れ目を速やかに発見し、修復する必要がある。大雨が降れば、堤防のあちらこちらで法面は崩れていく。川の増水によっても法面は崩れ、濁流が堤防の穴から噴出する。それらを一刻も早く発見し、修復しなければならない。

ここで、江戸幕府はある作戦を立てた。

当時、日本堤は、追い剥ぎや辻斬りが出没する寂しい場所であった。この寂しい日本堤へ、江戸市中の吉原遊郭を移転させたのであった。吉原遊郭が移転してくると、寂しい日本堤の風景は一変していった。

遊郭へ行く客は舟で隅田川を上り、浅草に着く。浅草から日本堤を歩いて吉原に向かった。一年中、ぞろぞろと多くの客達が日本堤を歩いた。日本堤に物売り小屋も建ち並ぶほどになった。

そのにぎやかさを、広重は「よし原日本堤」で描いている。本号の表紙の絵がその浮世絵である。

遊郭へ向かう客たちは、歩いて日本堤を踏み固めていった。堤を締め固めるだけでなく、江戸市民の視線が、日本堤の不審な変状や出来事を監視することとなった。

江戸幕府の狙いはここにあった。江戸の市民を、河川管理者にしてしまう作戦であったのだ。

江戸市民の命を守るハードインフラストラクチャ・日本堤は、江戸市民のソフトウェア・維持管理によって守られることとなった。

——たけむら こうたろう 財団法人リバーフロント整備センター理事長・立命館大学客員教授——